

新しい始まりのため 下方連帯精神を復元しよう！

タンビョンホ
段炳浩(平等社会労働教育院 代表)

今年、87年労働者大闘争30周年になる年だ。あの時の歓声が未だに耳元に生々しいのに、いつの間にか歳月は江山が3回も変わると言うくらいも過ぎた。あの時、闘いの現場にいた多くの労働者たちが労働現場を離れて行ったり、今残っている労働者のほとんども、もう直ぐ労働現場を離れる最後の時を目前にした年取った労働者になった。そういえば、当時ベビー服に包まれていた幼子は、いつの間にかパパやママと一緒に広場に集まってロウソクを灯し、世の中を変えるためのスクラムを力強く組むほどシッカリし、堂々とした青年に育った。今や過去と未来の労働が会って、もう一度、民主労組運動の新しい30年を準備しなければならない刻だ。

30年前の労働者の怒りと歓声は、炸裂する太陽の熱気よりももっと熱かった。盧泰愚の6・29宣言が発表され、金泳三・金大中がこれを受け容れたため、民主化に向かった闘いの戦線は急激に弱まっていった。しかし労働者たちは要求し続けた。盧泰愚の6・29宣言の民主化措置8項目のどこにも、産業現場の民主化に関する措置はなかった。これに怒った労働者たちは7月5日、蔚山の現代エンジン（現代重工業に合併）での労組結成を始まりとして闘いに突入し、これが全国にアツと言う間に拡大した。7～9月の労働者大闘争は3334件の闘いに延べ400万人の労働者が参加する中、3ヶ月間、爆発的に展開された。こうした闘いによって1200余りの新規の労働組合が作られた。

87年7～9月の労働者大闘争は、韓国の労働組合運動の歴史で大きな意味を持つ。最初に、87年7～9月の闘争を通じて広範囲な労働者が団結し、意識と組織を発展させる重要な契機になった。広範囲な大衆が自ら闘いに出てくることによって、自分たちを圧迫しているものはなにかということをはっきりと知ることになり、合わせて社会的な無力感や敗北主義を相当部分で克服することができた。労働者大闘争を経ることで、この地の労働者たちはようやく社会と歴史発展の主体としてそびえ立つことになった。

二番目に、労働者の持続的な闘いのための自主的な組織建設が重要な目標になった。7～9月の闘争過程で、多くの事業場に労働組合が結成された。既存の労働組合の民主化を要求する主張も力強く出てきた。その結果、1200もの新規の労働組合が結成されることになり、また既存の労働組合の執行部が追い出されたり、役員の内選制による選出が行われた。これによって民主労組運動の土台を構築することができた。

三番目に、労働組合の闘いが、従来の闘いに較べて全面的で、大衆的で、大規模に組織的な形態を帯びて進められた。大部分の闘いが『先ストライキ、後交渉』の形態を採って攻勢的に展開され、長期的な闘いにおいても頑強さを示した。また、ほとんどで地域的な連帯ストライキや、現代グループ労組協議会のような労働者の実質的な連帯が始められた。それだけでなく、反共主義や労使協調主義といった、政府と資本の労働統制イデオロギー克服しようとする努力も具体的な実践として現れた。このような過程を経ながら、自然に、民主・自主・連帯・闘争・社会変革と言われる民主労組運動の正体性が確立し始めた。

四番目に、重化学工業部門の大規模事業場の男性労働者が、労働者の闘いの先導勢力として登場することによって、軽工業の女性労働者中心の労働運動が持っていた限界を、一気に飛び越えることができた。そして独占資本を中心とする総資本との闘争戦線と対政府闘争の橋頭堡が造られるようになった。

五番目に、労働者階級が社会の前面に浮上して、この地の本当の主人が誰なのかを分からせる政治的な覚醒が速やかに行われた。闘争の期間中に見られた一定の社会民主化の要求（基礎的ではあるが、労働三権の保障、労働悪法の撤廃、拘束労働者の釈放などの政治的な要求）は、その後の労働法改正闘争を始め、政府を相手にする政治闘争と、進歩政党の結成に進むことになった。

87年労働者大闘争の精神を継承しなければならない（しよう）という声は、既にずっと前から、あちこちから出ている。これは現在の民主労組運動が87年大闘争の限界を克服する運動に進めないまま、ある面では却って後退していることを反証している。このような憂慮に深刻性を加えているのは、労組運動が、自ら抱えている状況の厳しさを観念的に受け止めていることである。

小さな問題が発生したときにも、問題が解決されないまま継続しているケースが多い。このようなケースのほとんどが、問題解決の答えを知らないのではなく、問題を解決する

過程で発生する利害関係に、強い保守的・防御的な態度を執ったり、責任と実践に伴う小さな苦勞を回避しようとする利己心のせいだ。現在の民主労組運動が新しい跳躍に進むことができないのも、まったく同じ道理だと思う。

現在、民主労組運動が抱えている問題に関する診断は、それこそ一杯で、溢れるほど出ている。これを大きく纏めれば、5～6項目に集約することができる。最初に、10数年間、組織の規模が大きくなならないままの停滞状態を示しており、民主労組運動の主体（青年・未組織・非正規の労働者）の再構成と若い活動家の養成が極めてノロノロとしていること、2番目に、民主・自主・連帯・闘争・社会変革によって代弁される民主労組運動の正体性が、相当部分毀損されていること、3番目に、実質的な産別運動に進むことができないことによって、労働者の意識が依然として企業（資本）従属性から抜け出せないでいること、4番目に、理念と路線の違いという名分を立てた党派活動が必要以上に葛藤を助長し、労働組合運動が持たなければならない最低限の統合性まで解体させていること、5番目に、大衆運動の基本にならなければならない民主的な秩序が、深刻なレベルにまで瓦解していること、6番目に、労働者をキチンと代弁してくれる正しい進歩政党を、政治的なパートナーとして持つことができていないこと、などを挙げるができる。

労働運動の持続的な発展のためには、絶え間ない変化がなければならない。「存在するすべてのものは変化する」ということだけが唯一の真理だと言われるように、世の中で変わらないものは何もない。労働運動を巡るすべての関係も時々刻々変化している。変化を主導したり、変化に能動的に対応できなければ、淘汰への道程を踏むことになるというのが、冷厳な進化の法則である。民主労組運動が成長・発展し、再跳躍するためには、このような変化の法則に忠実でなければならない。

民主労組運動が、今経験している困難から抜け出したり、一日も早く、極めて短期間で飛躍的に発展するものだと考えたり、そのようになることを望むのなら、それは行き過ぎた自負で、欲深いことだ。前に述べたように、民主労組運動が経験している困難は、相当な期間がかかって成長能力が弱まり、成長基盤まで縮小する中から出て来た現象であるため、短期間で回復するのは難しいからだ。現在、民主労総が持っている発展計画案をもう少し忠実に補完し、それを組織の全体を貫く基本方針にして、成長能力が強化されなければならない。

そして民主労組運動の足首が埋まっている沼から抜け出すことができる核心的なキーワ

ードは、『連帯』でなければならない。単純な水平的な連帯ではなく、徹底した『下方連帯』にならないといけない。「高く 遠く 飛ぶ鳥は／骨の中まで 空っぽで／水は 高いところから／低いところに 流れ／すべてのものを 抱く。」これは亡くなられたシン・ヨンボク先生が残されたとても短い『下方連帯』という詩だ。

労働運動の基本精神を正しく打ち立てたこと、87年労働者大闘争の精神を早く継承すること、停滞と退歩・危機の泥沼から抜け出すこと、などの回答が、非常に短いこの一編の詩の中にすべて込められていると思う。すなわち、民主労組運動がやらなければならない目的と、進まなければならない方向と内容のすべてが入っていると言える。

連帯というのは、上から下に、少しでも余裕のある人が困っている人に、心と手を差し出したときに本当の連帯が始まるのだ。中小・零細未組織の非正規職労働者・移住労働者・女性労働者・障害のある労働者が、どんな理由であれ差別を受けず、労働の対価を正当に受け取ることができなければならない。最も重要なことは、それら自らが問題を解決していく運動の主体として、高く立てるようにすることだ。これらすべてのことを決定付ける鍵は、正規職労働者の下方連帯の意識と実践意志にかかっている。

87年労働者大闘争の精神を継承し、合わせて民主労組運動の再跳躍を望むのであれば、慢性的なスローガンや主張、意志がこもっていない行動を越えていこうとする決断が優先されなければならない。そして先輩労働者と後輩労働者、過去の労働者と未来の労働者が額を合わせて一緒に創り出さなければならない、労働の価値が中心になる社会のその始まりは、連帯を復元することから可能である。それはそれほど難しいことではない。労働者（何よりも正規職の労働者）が少しだけ考え方を変えれば、民主労組運動の復元はもちろん、労働が美しい世の中も十分に創り出せる。87年労働者大闘争の精神の継承によって！！